

個体群管理事例 紀伊長島鳥獣保護区（三重県）

～モニタリングが導くカワウ管理の適切な管理～

株式会社野生動物保護管理事務所 加藤 洋

「モニタリング(monitoring)」とは、「状態を監視すること」、または「状態を観察し、記録すること」を意味する単語である。モニタリングは、野生動物の管理を考える上で、欠かす事のできない主要な要素の一つである。野生動物の対策を考える上で、基本となるのは「被害管理」「個体数（個体群）管理」「生息地管理」の 3 つの対策の「在り方」と、PDCA サイクルという施策の「進め方」である。刻々と移り変わっていく自然環境や野生動物の生息動態、そして我々人間の社会的背景を考慮しながら、野生動物の問題に対して有効な施策を展開するためには、現状を把握し、計画の立案→対策の実行→評価→改善→次期計画への反映、という循環（PDCA サイクル）を意識することが、基本かつ重要である。今回は、PDCA サイクルによってカワウ管理を進め、課題について一定の成果を導き出した事例について紹介する。

外洋に面した国設鳥獣保護区である紀伊長島鳥獣保護区（三重県紀北町）では、特別保護地区の一つである「赤野島」に 1980 年代よりカワウが生息している。近年、近隣の海域等における漁業被害や、樹木枯損と植生衰退による他種鳥類への生態系被害が問題となっている。環境省は、平成 21 年度より被害の実態把握とカワウの適切な管理を進めるための情報収集を実施し、平成 23 年度に「紀伊長島鳥獣保護区カワウ保護管理計画」を策定した（Plan）。この計画は、鳥獣保護区として鳥獣の良好な生息環境の維持を図る事を目的としている事が特徴である。保護管理の方向性はゾーニングを基本としたカワウ対策で、エリア毎に設定した目標に応じて、分布抑制対策（銃器捕獲・ビニルひも張り）とモニタリングより共存を目指している。平成 24 年度の対策の結果（Do）、管理の目標はある程度達成されたものの、その後のモニタリングの結果（Check）、縮小した分布域の中にカワウが高密度に生息し、樹木枯損速度の上昇や、分散の誘発のおそれが高まっている事が把握された。この新たに生じた課題に対しては、平成 25 年度より間接的個体数管理という新たな手法により改善を加えた対策を試験的に実施し（Act）、被害の軽減が図られている。このように紀伊長島鳥獣保護区では、平成 21 年度から平成 29 年度にかけて PDCA サイクルによるカワウ管理を進め、現在では目標の達成に大きく近づいている。

対策を行った結果、かえって状況が悪い方向に進んでしまう事があり得る。適切な野生動物管理を進め、または正しい方向に修正を行うためには、「対策」と「モニタリング」が 1 セットとなった計画が必須である。当事例では、モニタリング調査から生まれた新たな個体数管理技術の開発により、被害軽減の可能性を見出す事ができた。このように、モニタリングを充実する事で、課題の変化に対し新たな方向性を見出すきっかけが得られる事もある。専門家による助言を取り入れながら、モニタリングを通じて適切な管理を進める事が結果的に課題の改善への一番の近道へと繋がる。